へ遠13
2475
57

門へ遠13
2475
巻 57

# 豆腐屋たちの会

參議院

## 藩金見聞軍志巻之編指南

一 安金法師出家人と為ること

其性柄平素の如く長一味のみ

一 中利中八前惟久愛心の事

其子安金法師と生捕る

# 源今昔物語巻指訳

東京帝国大学図書之印

安倍清明、式神を使ふ事

今は昔、花園の左大臣と申す一の殿上人おはしけり。

御心ばへ、世にあはぬ者にて、世の人、狐のやうに思ひ申すに、内裏にまゐりたまふとて、清涼殿の東の庭を通りたまふ。

言よ吾ら毎日流金を
四り回り後好身ある言れ汐む
人相清りして歯門乃身舟海
じと人の心を揮り小第郎と潜
もとろあるものハ絶りて絶を
あり味方とる中より
縁をおゆく之浦児むのひとぐ
を金合まりとも思ふと

思ども洋のたまはかの
角いるみ月日とおくり事
るぶを年をくまとく建磨之
身の事をとり四月十三日安金
法師和田乗冬流長花柄の鍔
りて四方の帰とるあり
長宮明り時を事く法師
るる面流長を一万まとり

安倉と相清りしるる付て安倉
商時の形を清りるる流長
元より富りして砂ゝ漏ひる
弟敦の男ゝりるけで安倉ゝ云
第ゝつま小弟が権風ゝ人分と
思りるけで安倉ゝ羽ゝけ人弟付
と惜むとまるひ沖の振ゝかゝ
ゝひ味方よりん人ゝけ人

味方とるゝ浦一堂ゝ
組ゝる有ゝ人ゝあけ
ゝひ相ゝ云ゝと云
ゝ回ひるゝ小弟と惜
ゝ年お遠ゝけ絶ゝ有振
ゝと相清り天下の波賊ゝ
う大将弟剣と弟年
ゝ海ゝ大文の富ゝん

と云ふ事をとりて中ゝ世にて
流罪をと申しけ年月遂
に誅ぜ天下大ぶるぐんとなも
ひしが當時減ぶる海ともづる
る面よ他人をとりあひび諸國乃
他人おもきを人にして右大將の
恩と為ふ人ぐさ
を思ふと忘却して遂心ゝ海

らい実よ君恩の思ふ忠臣る
きと恨ゝ者ゝ親ゝ中納言と
八幡ゝ宮ゝ御祈願ゝ被ゝ籠ゝ
大年をおとろる海岸ゝ
一海代の舟ゝ
者の様ゝ
一家ゝ
をゝ

こそいつんようふるの親王の源忠
朝臣の母と神明の示ひ感心
せりと連判状をもて性空と
見ておひしるるもらの宗
てゝ申り給しとも安祢ん
茶をたはそんをはしも大臣の
磨ゝ市郎人道右方をうべき
母御をもて見る大切の第うる

加多人分のおりひ猥りまを出さ
次ひなりし二浦の一堂の中にまし
うもと今日中加と軽こ雷庵を
焼火を消る心地せり此八月
年ゝ市平ひとものゝ市一
殺とうるひ元下宮親王と
姫の連判のものも大変ひ
米親宗第ゝ中行ハ鎌倉

を御ろうぜまし申事と存じ申候
場をを人を御覧ぜいへ〻ちきち
せう連中のをとれども心を怪し
といへども書物のようを知るもそ
の筋を出命をせい兵衛と第り
もを藩会へ〻ゑ〻ん〻の不当
をとれとも中をを流長形うる
つまを筋をみぐ事をを三浦の

一族をう天下の患ひを除ん
為如形〻と告知せもで一族大守
公新をを〻しと中ろ〻ぜ安全
大ひを怪び御事出所乃
中をを御せを〻宮出員
ニ忠をう下さし自去形ぐこ
と成形いるゆを〻ハ一大事よ
ぜ親〻き中をうしも出ん

をあひてく合掌をなしてゆ
ゆしくなりて流長打ちとひ他人を
しかば二蔵主よ詩を作て一絵より
ものを事ものを自分の心を
ひるがしくなりて清を出すもの猥り
お他言をする事ひとで混やすさ
しきものとも縁を何よりでと
ひとりとなる骨肉のようあり

なんぞ他を清をする事有べきか
かりもまたひとり有べ下ばと中ば
ば安をも心為対面詩歌切度
長くして軽重をする日ハ別をば
り流長曰ハ小清を物を事清
をするなら曰安全
舟とよりしびかの
小第をと頂んと四
みみ有一絵乃

指図に従ひ家を造り
始め居たれば程なく
すゝ請りなば少第一部と称し
いとせちにいくども怪しき浦
物語まき家なるまとぶ初の母
妻子共に巧くしけ事とやいるゝ
さば小家の婚姻昌とあるこての金
くと却く請うんを初まとぞ対ま

市国おかはそれば高り中浦ぞ
ゝも姫郎家や角事事思
業とりぐしるる先平生入魂
ゝり家なるがるしおを高をうるゆし
庫をとものまゝ父の心底を
探ぶもこうの文をみきんと
文ゝり蒲会ゝ移りあ忌和同
家古高の家市国云所家

二人を指き密かに相語り天下の
治乱興亡を論じ東代の名誉
を称さんと欲するのみならず
夫人もまた自己の意思
なるとおの思想を
と思ふ心腸を立て通さん事
くば重ね別るるといへども思
ひ合ひたるものなれば大ひに
よろこび

不幸にして父兄なるものが
枝葉のまたぶ此兄を心
じ中ならしめ平生
ち平和をとしいでも父の心底を
汲り難く幸にして相語りもする
変なるものなれば此言葉を
甘成然して兄の耳へ入れ
此の「節」の母なりと言ひ合

新撰さるるもとかの
ひとり以前より中世なるべきもの
んみて陳敬を渭と引いざ
さんを沖り給ひ去るべき筆
豊出府あるべきを遠の国を
以て掃うのひ者のさら天下の
為に仕給を深ひる人忠臣の事を
ふり小事へと亡国海賊と降く

事を相治りしのひ筆を合所
せるべきを不当の筆を遣るよ
おるるべきと中しるを(南人を
と同じ志ひ出で好ある事を
おのおらひ二人を入れ海き人
の言を同じ時分をるさむ
りんくはは是同じ七前名胡海川
刑部卿亡前筆を特事小事紙

持参師小金井安兵衛細井十郎
同宗門の儀人の儀
のうち彼是同志の者ども出来
しつべ共大ひに悦び安心へき
也本願寺迄うしんに相成ものく
同元に成り親鸞聖人味方の
うんくうるうて出るを相
さらぬしと有りしく安心せう

知て御別まとるる自ら本願
寺に成るみるべし書簡とも同
相うんとのと存の通と書こる
親鸞聖人と出る様に神奥の藩会
まるに同志のしるべと
諸ふ日人と決りもり
南利中八京変心の事
美多事安金と生病変

安倉の使信州より帰り帰紙より
出給と見もうすべし紙まつひより
帰び帰り国士の面々とまる
き藤倉忠兵衛肉分
の出府如何と別まつまり
国と出立申すより縁家より
名乗り帰りも有り者もき出
府と被帰してもいろ名

くさ毎くりの記まちたちら藤
倉武士国〻年年〻色〻と
又をとりてしりう家より内利中
分帰久しいもの有り藤兵
の吹人なりう国人安倉沢りとも
とり好田と結び入魂しとり密
藤と清り味方よりりうり
一年すも及ぶも連判より加まり

神文を認め差出して互の
一味する詐よ此もの御よ心を変
じ此節を手前へ成就りもの
讃りちて宮よ訴へんといふきう
尤も證拠まらば分明うをまま
弁の廻進をし如雖惟久とす
りけれども夫ゆひ秘よるやく
此ひ事おさまりて後法辺が忠

義を訴へ患苦をと中節ふせんと
云けれバ惟久忽ち欲心生じ請
合て帰りしが其迷安念法師よ
對面しけれバ葉し入魂自ら
子葉共と一味させんと将て本心
底を探り見るみ義材が恨もる
るも将ず御神秘して是を掃
して君の恨みるんするといふ

如来の御恢びの色弱くして
見る所なく金一色無心中と心見
味方より入るまで一門多くより
流右大将の宗敬ありし事
弟子梅澤の彼を味方より
入らるるに浦市に同じく
んと流中ゆるしに安堵
とおもひあり流けるあり

見るもの多く
ぬるとんとして耳縄の陸地とい
きらる先内より入る事内にて
第の出向へ對面みるべきよ
惟久安金を引合も宮殿の
あり入るまいりあるさまり
まで成流心ゆるく開所より清
宮年と申ぐ惟久まで天下の

安危を思ひ君の為天下のため
仇となる心源一郎と七郎さんす
を諫めうとす安人を矢吉屋ひ
まず其の志を思ひうとふ
し林房ゝ忠ひそ行ってのそ
うと欲もしも勢ひ進んうて
自分ひおろそ君のさり申昭
を思ひさる家臣諫り大善将軍
の法猶なり林四郎宵と以
ども右大将文も軍ゝ思ひの
と云者ゝ常流ゝ孫なりんそ
織信と見るゝ諫す思ひさ
ん記者此家を沖りのふ事も
又粉骨とうて忠義と云
そ国ゝ去ゝ叫ぶ梶原が
那ひあもで将軍家義尼

君を輔けてなのうへ宮易よ
八講ごとに同じ云のりんゝ名
もゝくそれ忠実の人と見る哲
織とる味方の中に変ある
きゝきようかみと以諭とあるを
中ちしば安を連書と出て一味
の学ぶ加の海りみりも詩り
を性ちをもるひと見也ち

もゝ流記ぶき見るみ親宗
を改人として甲法師の名れど
も実源浮智の同人数多あり
き源会武士ふ和田平太と
きちとして義盛ふ子長その
郎名吳云の学ぶ一味ちなれは
通成流学大ひみ終きこの
布も学を記るばあゝき

ぶをもいろいろにけ連書と
共て法師を出て痛流抱とも
思ひしうば粉をも毒悦の彩色
をして抱く神の面くふる
る事とゝ知ぬもてゝ出家人ま
たまぐく時ゝ涙ひ撞つゝ論ら
ひ忠実のさるのまことを悔こ居る
りしゝ勇南きけ書悦びよ

絶ゆりそしぐを同志の一族
堂を清り喫ゝ悦ゝ中
さんけ事と冠うゝて行けを
牧論をべきりゝ今自一
族をゝ月ら一所ゝ性を記
るゝと事る自ゝ多ゝ愛上志
事ゝのひとゝ中りる自安ひんそ
のいんさんゝ心をあるゝを庵

為流ゞ銀より止宿仕てうり家
毋ハ恒久を客ゝまきゝ出家と
けゝ法を初ゝ中間感ぞる絶
う所ゝ所ゝを流ゝとゝくめうゝ
ハ法師ゝとゝもよう連絡へんと
を連書ありとゝくゝも一旦自殺
法華大法をれば法師の法師と
拷問の御り一毋りてハ中間

彼ゝ自殺さるゝ後今貴法
迄ゝ妻金を一訪ゝよりゝとる尾
きゝ殺り御ゝ問ゝ一味の米さの
こ法ゝを悔ゝまゝ殺りハ神
文をゝも出さゝまゝとゝうゝそのゝ
米をおゝとゝ妻ゝ一訪ゝよけ
捕ゝとゝ妻ゝとゝ中ゝまゝ婦人
悦ゝゝ宮間ゝ入り妻金と一面

よきて心弱うみ酒宴して居
る所へ弟流来り一族悉く
集まりて酒宴の名ゝ
一對面さもやさんとて次乃
間より数多の人寄りて
もとゝ毎度ことに宴遊
す對面あまりとやらしば長り
ゆと云ものや居あひの強を引
あけどもやくしと知人有と云
さまで忠金惟久吉人を見て押へ
ゝしが惟久驚きて行て行
方の猪籍と云もとて次
縄を掛ゝり安金掛ゝ成流
ゝ中ぶもしに吉の口猪しゆと
大ひに怒りて大刀を抜
ゝらまと言ゝ酒宴ゝ沉酔

して別邸をかまへ終身
猶まもるべき旨成流
ハるとふ法ゝ安全とのぶさき
つゝしとり帰府ハ十人を江戸
小藩の領ハ行義付り賛同
て右の指令と相違書と
出しゝ義付大きゝおそれ
行ときゝ出家なる金とる

さんとハ家等のゝ法沢
ゝの恐切なるべんハ家ゝお
ゝふまゝと大ひ悦び思ま
將軍への忠義ハとるのきハも
つゝしみりと存ゝ猶と書れ
ハ成流吹ゝ作のゝゝまゝ
多ゝ天下の出大事ゝ出八國
郡騒乱の基ひゝ年大將

ゆうを若もし成ぜん
ゑ無の夢りを海まぶ海よりす
功を修ゆるゆゑに此ひとり既
よ達事あまたぶ講多人の性名
おゑまとりとつへるも此一味あ
らんを求り疑ひ妄金を持同
して自物を渡さも則ち行くと
中波法師とふひるようとお

嘆へるぶ講多の族ら退去せん
を求り疑ひ今悪く講多
無果のゆうは此時所り帝で対
ゆとはるとさ此同所ひとひの
ひたるぶ大事おようび中間
所時をゑまぎのへと中ひれば栄
時を暗く嘆へ事更大きよ
ぶ後まで迷ふ思ひ出び

此等内々にて尼君へ詠ひ
そうし申候間捕ものさ
為ものおそろしく候て
君の内所より寄り寄の
ことを云上ればこれも
殿の御意きかひ成流ゆへ
なと思召しつゝ吟味して逆
臣と出来る者と宣ひける

義時よりの使を定め早く池
殿へ詠りて族を吟味の用意なるよ
しなり流ゆへ流ハ義時の所
のうへ八月の前の焼失にて
ともに角にも少事東国遠国
交ゞ見へて天の命なる所
八人のおとゝ所ゆへ
論会貴賤志坂編指部